【主題】基礎・基本の定着と自己表現力の向上を目指した継続的な英語指導の工夫

【副題】語彙指導・ノート指導・自己表現活動の連携を通して

【学校・団体名】亘理町立荒浜中学校
【役職名・氏名】主幹教諭　岡崎正則

1　はじめに

現行の学習指導要領のもとで，小学校と中学校の接続が重視され，中学校外国語科では扱う語彙や表現が増加するとともに，既習事項を活用して自分の考えや気持ちを表現する力が求められている。小学校で音声を中心に慣れ親しんできた英語を，中学校では「読む」「書く」力へ結び付け，さらに英語で表現できるようにつなげていく必要がある。

一方，指導現場では，学習内容の増加に対して生徒の理解や定着が十分に追い付かず，英語に苦手意識をもつ生徒も少なくない。本校は少人数特例校であり，一人一人に目が届きやすい反面，学習状況には大きな差が見られる。英語科に限らず学習に苦手意識をもつ生徒に加え，日常の学習活動そのものに大きな困難を抱える生徒も在籍している。

私は以前から，こうした生徒を含め，一人一人に，テストで学習の成果を実感し，自分のことを英語で話せる力を身に付けてほしいと考え，授業実践を重ねてきた。その中で大切にしてきたのは，教科書で学んだ語彙や基本文を一度の学習で終わらせず，授業，ノート，テスト，自己表現の中で何度も使わせることである。本研究では，これまで継続してきた指導を整理し，その有効性を生徒の姿や意識の変容から検証することとした。また，学習した直後には理解できても，次の単元に進むと使えなくなる姿も見られるため，既習事項を後の学習で再び使う場面を意図的に設けることも重視している。

2　研究の目的と研究仮説

（1）研究の目的

生徒が，学んだ語彙や基本文を繰り返し活用しながら基礎・基本を身に付け，自分の考えや身近なことを英語で表現する力を高めることを目的とする。そのため，帯活動による語彙指導，ノート指導，単元テスト・定期テスト・再テスト，自己紹介文の作成と発表などを相互に関連付けた指導を継続する。これらの実践が，学習に困難を抱える生徒を含め，一人一人の学力や自己表現力の向上につながっているかを，生徒アンケート，授業中の姿，自己表現の内容，参観教員の意見等から検証する。

（2）研究仮説

帯活動による語彙指導，学習内容を整理して繰り返し活用できるノート指導，単元テスト・定期テスト・再テスト，自己紹介文を中心とした自己表現活動を関連付けて継続すれば，生徒一人一人が基礎・基本を身に付け，学習への見通しを持ちながら，自分の考えを英語で表現する力を高めることができるであろう。

3　研究の内容と手立て

本研究では，「教科書で学習した内容を一度で終わらせず，様々な場面で繰り返し活用すること」を基本とし，語彙，ノート，テスト，自己表現を相互に関連付け，年間を通して指導した（図1）。こうして，学習した語句や基本文が次の活動で再び必要になるようにし，生徒が同じ内容に異なる形で繰り返し触れる授業構成としている。

語彙・基本文を学ぶ
↓
② ノートに整理し，自分の英文を残す
↓
③ 単元テスト→定期テスト→再テスト
↓
④ 自己紹介文・表現課題で再び使う
↓
⑤ 発表・やりとりで実際に使う

図1　学習内容を繰り返し活用する指導の流れ

（1）帯活動による語彙指導

授業の始めには，毎時間５分以内（実際には３分程度）で，小学校既習語彙を中心とした小テストを実施している。短時間で継続して取り組ませ，既習語彙を繰り返し確認する。小学校で学習した単語を含む新出語句についてはフォニックスを取り入れて指導している。アルファベットの名前読みで一文字ずつ覚えるのではなく，音と文字を結び付けて読ませ，随時，書く活動も繰り返している。小テストで扱った語がその時

間の本文や表現活動に現れるようにすることで，覚えるための語彙学習ではなく，その後に読む，書く，話すための語彙学習として位置付けている。

新出語句の導入時には，フォニックスを用いて音と文字の関係を確認し，音を手掛かりに綴りを捉えさせる。小テストで誤答した語句は10回書いて提出させ，その際，必要な場合には，生徒の習熟状況を踏まえ，綴りや読み方を確認している。

（2）ノート指導の工夫

ノートは，教科書本文と語句の意味の位置関係が一目で分かるように作らせている。向かって右側に教科書本文を書き，左側には本文と同じ位置に対応する語句の意味を書く。例えば I read an English book. であれば，左側に「私は　読む　一つの　英語　本」のように日本語を書く。日本語として整った訳文を作らず，冠詞を含め，英文を英語の語順のまま捉えさせるためである。

ノートを中央で折れば，右側を隠して「日本語→英語」，左側を隠して「英語→日本語」の問題集として使うことができる。左下には授業中の板書や注意点を書き，右下には基本文を自分の興味や生活に置き換えた英文を残す。右下だけをページ順に見れば，授業中に作った自分の英文が連続して現れる。長期休業中の課題となる自己紹介文の作成では，新しい文を一から考えるのではなく，ここに蓄積した英文を選び，話がつながるように並べ替えてまとまりのある文章にする。この構成は学年が変わっても基本的に変えず，生徒が新しい単元でも同じ方法で整理し，自分で確認できるようにしている。

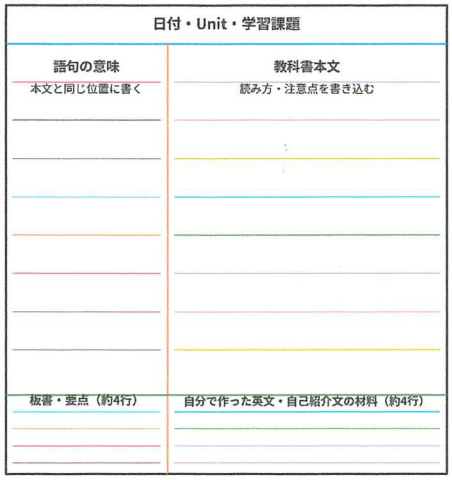

図2　コーネル式ノートを基にしたノートの構成

（3）単元テスト・定期テスト・再テスト

単元テストはUnitごとに「言語」「内容理解」「表現」に分けて実施している。「内容理解」はノート持ち込み可とし，日頃作成しているノートを使って教科書本文の内容や単語の意味を確認できるようにした。問題は，本文と語句の意味を対応させてノートを作っていれば高得点を取りやすい構成にしている。そのため，日頃からノートを作成し，学習に活用することの必要性を生徒自身が実感できるようにしている。

定期テストは，最初に「自己紹介文・表現」を15分，次に「言語・間違い探し等」を15分，最後に「聞き取り・教科書本文読み取り」を20分で実施する。用紙を分け，その都度配付・回収することで，語彙，並べ替えなどの表現，本文の読み取りの全てを教科書から出題しながら，他の問題から答えを写せないようにしている。自己紹介文と教科書本文読み取りを除き，定期テストでは単元テストで扱った問題を基本的に用いる。テストを一枚にまとめず三枚に分けることで，出題内容と，日々の授業やノートがテストにどのようにつながるのかが分かりやすくなる。

自己表現では，第1学年から定期テスト範囲に合わせた基本文を用いることを基本とする。第1学年最初の定期テストでは5種類，その後は第2学年まで10種類の基本文を含む自己紹介文を書かせる。第3学年になると自己紹介文だけではほぼ全員が満点となるため，基本文は5種類とし，授業で行った「中学校時代の思い出」や「グラフの読み取り」などの表現活動からも出題し，5文以上で書かせる。

定期テストの約一週間後には，誤答の多かった問題を集めた再テストを行う。単元テストで一度間違えた問題であっても，振り返って理解し直せば定期テストや再テストで正答できる。この流れを繰り返し，間違えた問題を必ず振り返り，やり直す学習習慣を身に付けさせることをねらっている。

（4）自己表現活動の工夫

文法事項を説明した後は，教科書の基本文を自分の生活や興味・関心に置き換えて英文を作らせる。教師が完成した文例を先に与えるのではなく，まず生徒自身に書かせ，数名の英文を黒板に書かせる。その英文を全体で確認し，よりよい表現にするための意見を出し合う。最初から正確さだけを求めず，書いた後に直せばよいことを日常的に経験させる。

自己紹介文は第1学年から第3学年まで継続して作成する。長期休業ごとに，直近に学んだ基本文を5種

類ずつ加え，それまでに蓄積した英文を話の流れに合わせて並べ替え，まとまりのある文章にする。第１学年夏の５種類から始まり，第３学年冬には45種類の基本文を含む自己紹介文となる。最初から「自分の好きなこと」を題材にするよう伝えているが，第１学年では英語を間違えることへの抵抗感が強く，部活動や好きなアニメなど，周囲，特に成績のよい生徒と似た題材を選ぶことが多い。発表の機会を重ねる中で，発表時に誤りをその場で指摘されないことや，他の生徒と違う内容でもよいことを理解していく。その段階から，周囲に合わせるのではなく，自分が本当に好きなことや伝えたいことを題材にした自己表現へ移っていく。このように，自己紹介文は，それまでの自分の英文を残しながら内容を増やしていく継続的な活動である。

ICT は活動の中心には置かず，音読の反復練習や，自己紹介で内容に合う画像・動画を示す場合に活用している。

（５）個に応じた支援と学び合い

授業内ではpeer correctionを日常的に取り入れている。座席は教師が固定せず，生徒自身が「この人の説明なら分かる」と思える相手の近くで学べるようにしている。ただし，理解に時間がかかる生徒同士で集まったり，理解の速い生徒同士だけで固まったりしないよう，「分からない人に説明すること」も学習の一部であることを伝えている。実際には，多くの生徒が机を付けて学習し，分からない生徒が周囲に尋ねたり，理解した生徒が説明したりする。黒板に書かれた英文についても，どこを直せばより伝わりやすくなるかを全体で考える。それでも定着が十分でない場合には，昼休みや放課後を利用し，小テストや単元テストで誤答した語句や基本文を中心に補充学習を行う。教える側にとっても，相手に分かるように説明することは，自分が語句や基本文をどこまで理解しているかを確かめる機会になる。

また，How do you say ～ in English?，How do you spell ～?，Could you say that again? など，困ったときに使うクラスルームイングリッシュを繰り返し指導している。ALT との個別リスニングテストでは，あえて生徒の知らない語を含む質問を行い，ALT にその語の意味を確認しなければテストの質問に答えられないような発問を意識的に取り入れている。覚えた定型文を読むのではなく，実際に必要になった場面で使わせるためである。

４　研究授業での検証方法

第２学年の研究授業では，普段と同じ授業の流れの中で，新出語句と新出文法を学び，それらを用いて自己表現する授業を行った。ねらいは，新たに学ぶ語句や文法を一部の生徒だけでなく，分からないことを互いに確認しながら学級全体で身に付けることである。授業の流れが日常的に定着していれば，教師が英語で説明や最小限の指示を行っても，第２学年の段階で普段と同じように学習を進められるのではないかと考え，文法事項を含めてほぼ英語で授業を行った。授業者が活動の手順を日本語で一つずつ説明しなくても，生徒がこれまで身に付けてきた学び方を使って授業を進められるかという点も，日常の指導の積み重ねを確かめる材料とした。

授業は，単語テスト，本文・語句の確認，It is ～ to... の文法学習，自己表現という普段の順序で進めた。細かな指示がなくても次の活動へ移り，分からない点を周囲と確認しながら，新出文法を用いて自分に関する英文を作れるかを観察した。

５　実践の成果と考察

（１）生徒アンケートから

第１学年と第２学年の同一項目によるアンケートを比較した。２回目の調査で「とてもそう思う」「そう思う」と回答した割合を見ると，「単語の意味を理解することで教科書の内容が分かりやすくなった」は第１学年46%に対し第２学年94%，「ノートに単語の意味を整理することが学習に役立つ」は57%に対し94%，「基本文を使って自分のことを英語で表現できる」は64%に対し 81%であった。「授業で分かることが増えた」も57%に対し88%であり，複数の項目で第２学年の肯定的回答が第１学年を上回った（図３）。

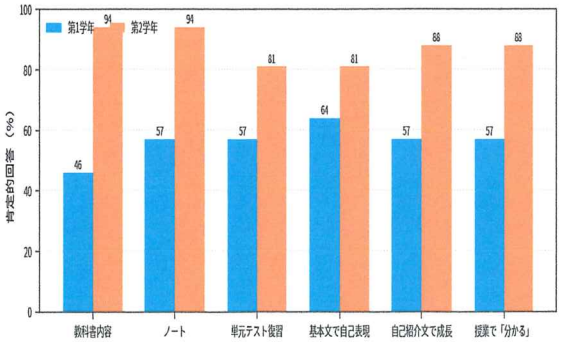

図３　第１・第２学年アンケートの比較（第２回調査）

なお，第２学年は入学当初から文字やローマ字の理解に丁寧な指導を要した生徒も少なくなかった。異なる学年集団の比較であるため，数値差をそのまま指導

効果とはせず，今後も継続して検証する。

第１学年の自由記述では，「単語を書けるようになった」という回答が多く，最も役立った取組としてノート指導を挙げた生徒は約57%であった。

（2）研究授業で見られた生徒の姿

研究授業では，教師が文法事項を含めてほぼ英語で説明したが，生徒は細かな指示を待つことなく，普段と同じ流れで活動を進めた。It is ～ to ... を用いた自己表現では，学習に大きな困難を抱える生徒も，周囲の生徒から説明を受けながらノートにメモを取り，It is fun to play tennis. と自分に関する英文を書くことができた。一方，習熟度の高い生徒は，when や because を用いて既習事項を組み合わせ，文を続けていた。このことから，英語による説明を理解する力に加え，普段から身に付けてきた授業の進め方や，生徒同士で確認する学び方が活動を支えていたと考えられる。

参観教員からは，「ほぼオールイングリッシュで授業が進んでいる」「生徒が教師の英語を理解している」「単語テストが授業に生きている」「生徒の英文を黒板で共有していて分かりやすい」などの意見があった。一方，学習に大きな困難を抱える生徒の理解を見取りたいとの指摘もあったが，授業者は，支援を必要とする生徒も周囲の説明を受けながら最後の自己表現まで参加する姿を確認した。

（3）自己表現の質的な変容

自己紹介文を継続する中で，書く量だけでなく題材の選び方にも変化が見られた。初期には部活動や好きな番組など共通しやすい話題が多いが，発表経験を重ねると，例えば「錆びた味のあるガンプラの作り方」や「『あうんの呼吸』を英語で伝える」のように，自分の経験や関心を掘り下げた題材を選ぶ生徒も見られるようになった。

習熟度の高い生徒には，高校英語の教材を自ら用意し，約80種類の基本文を用いて自己紹介文を発展させた例もあった。一方，英作文を苦手とする生徒は，ノート右下に書きためた英文から必要なものを選んで構成できる。同じ活動の中で習熟度に応じて表現を広げられる点も本実践の特徴である。

（4）学習方法の定着

単元テスト，定期テスト，再テストをつなげ，誤答した内容に再び取り組む機会を設けている。同じ内容を繰り返し扱うことで，間違えた問題を振り返り，やり直す姿勢を習慣化させることをねらっている。

ノートは単元テストの「内容理解」や自己紹介文にも活用する。卒業後も中学校時代の英語ノートを使っているとの報告があり，ノートを使って学ぶ方法が継続している可能性がある。

（5）研究仮説の検証

アンケートでは，学習内容が増えた第２学年で教科書理解，ノート活用，自己表現の肯定的回答が高かった。研究授業でも，学習に困難を抱える生徒を含め，それぞれの習熟状況に応じて基本文を用い，自分のことを書く姿が確認できた。語彙，ノート，テスト，自己表現を関連付け，既習事項を繰り返し使う構成は，生徒一人一人の基礎・基本の定着と自己表現力の向上を支える手立てになったと考える。

6　今後の課題

（1）中・長期的な定着度の検証

学年を超えた既習語彙や文法の活用及び定着度を，中・長期的に検証する必要がある。今後は，卒業後も含めて学習内容や学び方がどの程度継続しているかを把握していきたい。

（2）教員の補充学習に向けた時間確保と組織的体制の構築

個に応じた支援を継続するには，昼休みや放課後の補充学習時間の確保が必要である。個々の教員だけに依存せず，教科内・学校内で支える組織的な体制づくりも課題である。

参考文献

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』開隆堂出版
遠藤裕美子『自分を語る英語術』新潮社
靜 哲人『英語テスト作成の達人マニュアル』大修館書店
吉永賢一『東大家庭教師が教える頭がよくなる記憶術』中経出版